死別経験の再ストーリー化

異文化環境における「人生紙芝居」を用いた支援実践から

○糟谷知香江¹・Tatiana Blanco² (非会員)

(¹九州ルーテル学院大学人文学部・²中米社会科学大学心理学部)

キーワード: ナラティブ, グリーフケア, コスタリカ

Re-storying bereavement in psychological practice using *Kamishibai* (Japanese story cards)

Chikae KASUYA¹ and Tatiana BLANCO²

(¹Faculty of Humanities, Kyushu Lutheran College, ²Faculty of Psychology, Central American University of Social Sciences)

Key Words: Narrative, Grief care, Costa Rica

目 的

大きな喪失を経験したとき、ライフストーリーを語ることは人をエンパワーする効果があるという (Harvey, Carlson, Huff, & Green, 2001)。喪失経験に新しい意味を見いだすことで、喪失に伴う人生の変化に適応しやすくなるからである。経験に対する意味の発見は、ライフストーリーから文書や記録を作成することによって促進されると考えられる。グリーフケアにおいては「故人の伝記」(Neimeyer, 2002) というものがあるが、これは故人の生涯に起きた重要な出来事などを記録した文書であり、遺族が自らの喪失について考えるツールになると同時に、故人の一生を手元に置くような心理的効果があるとされる。同様の効果は、遺族自身のライフストーリーのなかに故人が位置づけられる場合にもみられるのではないだろうか。自らの喪失について他者に打ち明けることは亡くなった人を忘れられないという感覚に変化を生じさせる。とらわれているような感覚が弱まっていけば喪失に順応しやすくなると考えられる (Harvey et al., 2001)。

ライフストーリーは、絵画や写真、映像などのメディアによって視覚化することもできる。視覚的な手がかりは経験を多角的に捉えることに寄与すると考えられる (Rigazio-DiGilio, 2001)。日本の福祉施設で用いている「人生紙芝居」(奥田, 2006) は手作り紙芝居の一種で、個人の人生史を主題とするが、これも紙芝居というメディアによってライフストーリーを視覚化する技法と位置づけることができる。糟谷 (2014) は人生紙芝居を中米・コスタリカにおいて心理的支援のために活用している。本研究では人生紙芝居による介入を行った事例について報告する。

方 法

対象者は40代のグアテマラ人女性で、コスタリカに在住して約10年、子どもが3人いる。夫を病気で亡くしたことを契機に、第二著者の心理面接を受けるようになった。20XX年、コスタリカにおいて第一著者が人生紙芝居を用いた介入を行った。期間は2週間、計3回の面接を行い、総時間は190分間であった。介入は全て第一著者が、対象者の母語であるスペイン語で実施した。なお、介入期間中も第二著者による心理面接は平行して行われた。倫理的配慮としては、研究の目的、研究への参加は任意であること、個人情報保護されること、また研究開始後も随時辞退できることを説明し、書面による同意を得た。

結 果

【第1回】河村 (2000) によるライフラインの技法を参考として、これまでの人生における幸福感の高低と重要なライフイベントを記入するよう求めた。ライフラインをもとに、人生史について非構造化面接を行った。対象者には自分が語りたいと思うことのみを話すよう教示した。なお、面接においては過去だけでなく現在および未来の生活にも話を向けた。

面接後、語られたライフストーリーを第一著者が文章に書き起こしたうえで、紙芝居の脚本を作成した。また、八つ切り画用紙に鉛筆で図版のラフスケッチを描いた。

【第2回】脚本と図版を対象者に呈示し、加筆・修正を求めた。脚本は微修正であったが、図版は対象者の希望に沿って大幅な変更を加えた。このとき対象者は、たくさんの写真を自主的に持参してきており、写真を示しながら第1回の面接では触れていない経験を語った。

面接後、第一著者が紙芝居を完成させた。画材にはクレヨンと黒サインペンを使用した。また、デジタルカメラを用いて図版を記録した。

【第3回】人生紙芝居の上演会を第二著者の立ち会いの下で実施した。観客は対象者とその子どもたちである。制作した紙芝居は上演会の最後に対象者に贈呈した。その後、自由記述式の質問紙により、気に入った図版はどれか、また上演会で何を感じたか尋ねた。彼女は、夫の死だけでなく、子どもの頃に父親を事故で亡くしたときの辛さを忘れられずにいたが、介入を通して、「父の死が夫に出会うための準備をさせてくれた」「私はたくさんの困難を克服してきた」という回答であった。また、グアテマラに住む母親に会うときに、紙芝居を見せていろいろ話をしたいと述べた。

考 察

対象者は父親および夫の死の記憶にとらわれている感覚を持っていたが、介入により死別経験の意味に変化がもたらされた。人生紙芝居がライフストーリーを視覚化し、死別経験の意味の再構成を促進したのではないかと考えられる。また、人生紙芝居には社会的機能もあり、紙芝居の上演を通してストーリーを家族と分かち合うことができる。人生紙芝居は、喪失の記憶について話す機会を提供すると考えられる。

なお、過去を振り返ればネガティブな発見をしてしまうこともあるので、対象者の参加意志が重要となる。また制作過程においては、ネガティブな感情を伴う経験の取りあげ方について対象者の意向を十分に確認する必要があるだろう。

主要引用文献

- Harvey, J. H., Carlson, H. R., Huff, T. M., & Green, M. A. (2001). Embracing their memory: The construction of accounts of loss and hope. In R. A. Neimeyer (Ed.), *Meaning reconstruction and the experience of loss*. Washington, DC: American Psychological Association, pp. 231-243.
- 糟谷知香江 (2014). ナラティブ・アプローチによる経験の振り返り: 「人生紙芝居」を用いた試行的実践 応用障害心理学研究, 13, 37-46.
- Neimeyer, R. A. (2002). *Lessons of loss: A guide to coping* (2nd ed). New York: Brunner Routledge.

【付記】本研究は JSPS 科研費 24617014 の助成を受けた。